

## 江戸・東京語における否定表現構造の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-08-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 許, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/17497">http://hdl.handle.net/10291/17497</a>

2014年度 文学研究科  
博士学位請求論文（要旨）

江戸・東京語における否定表現構造の研究

学位請求者 日本文学専攻  
許 哲

内 容 の 要 旨

1. 本研究の問題意識と目的

日本の歴史における「近代」は明治期に始まると一般的に言われるが、社会の近代化の萌芽は、西洋との接触により、明治維新以前の江戸時代末期（幕末）にはすでにきざしていたと考えられる。

日本語の歴史における「近代語」も、広義には室町時代以降、狭義には明治新政府の成立する 1868 年に始まり、太平洋戦争の終結する 1945 年まで、もしくは国定教科書の使用されていた 1949 年までをその範囲とするものと見て、引き続き現代語へとつながっていくものとされる。

日本語の歴史的推移を考察する上で、幕末から明治期にかけての半世紀は、特に重大な意義を持つ時期である。それは、近世から近代への大きな政治的・社会的・文化的変動が背景となり、日本語において、画期的な大きな変化がもたらされたからである。その変化の外的要因の主たるものには、身分制度の崩壊、廃藩置県、教育の普及、西洋文化の影響等があり、この時期に江戸・東京語を基調とする近代語は、中央集権的な近代国家日本の全国、全階層の人々に通用する標準語（国家語）的な性格を帯びて普及されていくようになる。

本研究は、そのような近代語の中心となった江戸・東京語による文献を調査資料として、否定要素を含む表現構造を、その文法的形式

と意味機能の両面から考察することにより、近代における言語実態の一端を明らかにすることをその目的とする。

本研究における「否定要素」とは、形容詞「ない」、ならびに、「ぬ」「ない」「まい」「まじ」等、用言に後接する否定の助辞を総称したものであり、「否定表現」とは、それらの否定要素が、用言ならびに体言と関与した表現である。また、「述語部」とは、中心となる述語に助辞が後接する構造体全体を指し、文の主節と従属節、重文の途中にある述語部を分析の対象とする。

2. 本研究の構成ならびに各章の要約

本研究は、序章、第一部（第 1～3 章）、第二部（第 4～8 章）、終章から構成されている。

序章では、本論文における研究目的、分析対象、調査資料、構成、凡例について述べる。

第一部（1～3 章）では、近世後期から明治期にかけての否定表現の系譜について通観する。

第 1 章では、近世後期江戸語における否定表現について見る。近代以前の「近世」という時代と「江戸語」について概観するのは、江戸語が東京語の基礎になったという事実を鑑み、近世から近代へ、江戸語から東京語へという通時的視点を確保するためである。そして、近世後期江戸語において否定表現がどのような様相を呈していたのかを先行研究をもとに整理する。そして新たに、人情本

『仮名文章娘節用』の信頼しうるテキストを資料として否定表現の調査を行なう。

第2章では、明治期東京語における否定表現について見る。1章で見た近世後期江戸語との関係性に留意しつつ、「明治」という時代と「東京語」について概観し、明治期東京語における否定表現についての先行研究を確認する。また、明治期における否定表現の認識を、アストン(1888)『日本口語文典』第四版をもとに見る。英米の研究者が著した日本語の文典や会話書は、日本語を外からの別角度から照射し、従来の観察では言及されなかった新しい結果を提供するもので、明治期東京語の実相を知る上では大変有益な資料となるからである。

第3章では、第一部のまとめとして、近世後期江戸語と明治期東京語における否定表現について概括する。

第二部(4～8章)では、明治期東京語の否定表現構造における否定要素と文法カテゴリについて考察する。

第4章では、明治前期に丁寧体否定形のマセヌがどのようにマセンへと推移していったのかを、当時の人々の言語使用の実態を写したと想定される、口頭語相当の発話文を含む文学作品を対象に考察する。その際に、近世から受け継がれこの時期に衰退しつつあった江戸語と比較したとき、この時期の語法や表現において顕著であった「分析的傾向」と「複合辞」の発達観点から分析を試みる。

第5章では、明治後期において、丁寧体否定形のマセンとナイデスがどのように併存し、使用されていたのかを考察する。丁寧体否定形のナイデスは、明治期以後のデスの伸張とともに出現し、使用されていたものと考えられる、比較的新しい形式である。ここでは、明治後期に発表された夏目漱石の小説を資料として、ナイデスという形式が、明治東京語において一般化されたと考えられる

比較的早い時期の実態を調査し、マセンとの相互関係を考察する。

第6章では、明治期の言文一致体の文学作品である二葉亭四迷『浮雲』を取り上げ、一述語部内における複数の否定要素の形式と意味について考察する。また、尾崎紅葉『金色夜叉』を対象として、複数の否定要素を含む述語部構造を分析し、通時的な視点に立って、述語部における否定要素を含む複合辞を、文法化の程度に焦点をあてて考察し、その階層化を試みる。

第7章では、述語部否定構造における文法カテゴリの結合について見る。『小公子』をはじめとした若松賤子の翻訳作品を調査対象とし、「丁寧・否定・過去」からなる述語部の諸形式がどのように併存していたのか、その実態を確認し、それらの諸形式がマセンデシタへと統合されていった経緯を追求する。具体的には、若松賤子が英語の翻訳文において、「丁寧・否定・過去」の述語部諸形式をどのように使い分けていたのか、なぜ若松が多用していたマセンカッタは衰え、マセンデシタへと次第に移行していったのかを、述語部の構造におけるマセンカッタの表現価値という点を通して明らかにする。

第8章では、第二部のまとめとして、否定表現構造における否定要素と文法カテゴリについて概括する。

終章では、第1～8章までの調査・分析をふまえ、江戸・東京語における否定表現構造について、全体を通しての考察を行なう。本研究の結論を、①江戸後期から明治期における時代背景と言語の遷移、②当該時期における否定表現の認識、③丁寧体否定表現(「丁寧・否定・現在」および「丁寧・否定・過去」)の使用状況、④述語部否定構造の諸形式、という四つの側面からまとめる。